

生涯学習論

企画の考え方と展示の技法

馬場 幸栄
baba.yukie@nichibun.ac.jp

はじめに 西洋貴重書の生涯学習と展示論

収蔵書を生涯学習に活かすことは図書館職員にとって重要な仕事のひとつです。なぜなら図書は教育研究に利用されてこそ、その価値が人々に理解されるからです。もちろん西洋貴重書も例外ではありません。

しかし、西洋貴重書はその歴史的・文化的・経済的な価値の高さゆえに、図書館職員にとっても利用者（潜在的利用者を含む）にとっても「馴染みのない存在」「敷居の高い存在」ととらえられがちです。そして、それゆえに、西洋貴重書を活かした生涯学習はどのように企画したらよいかかわからない、実行するのが難しそう、という声をよく耳にします。

そこで本講義では、西洋貴重書を活用した多様な生涯学習の企画の考え方や事例をご紹介しますとともに、生涯学習の代表的な形のひとつである展示の技法について解説します。西洋貴重書を生涯学習に活用するためにはどうしたらよいかを一緒に考えてみましょう。

1-1. 企画の考え方

西洋貴重書に関する生涯学習イベントを企画することや、自館でその準備をすべて行うことは難しいと思われるかもしれませんが、難しく考える必要はありません。普段図書館で業務を行っているときに湧いてくるちょっとした疑問や願望は企画のアイデアの源泉となりえます。自分が興味を持っていることから企画を考えてみましょう。また、必ずしも自館の職員が講師を務める必要はありません。日本の貴重書についての講演、古文書解読教室、くずし字教室などを企画・運営するときと同じように、大学教員や他館職員など、各分野の専門家に依頼して講師を務めてもらうとよいでしょう。なお、限られた予算・人員・時間の範囲内で無理なく実行できるかどうか、企画を考える際には考慮しましょう。

1-2. 事例

展示（対象：小学生～高齢者）

西洋貴重書の展示は人気のイベントです。金沢工業大学による西洋貴重書展「世界を変えた書物展」は過去6回開催されており（2012、2013、2015、2018、2019、2022年）、最初の3回だけで約10万人が来場しました。2018年に上野の森美術館で開催されたときには、17日間で7万人近くが来場して大盛況となりました。この展示は、西洋貴重書に関する展示が秘めている潜在的な力を示してくれました。



書物史講座（対象：小学生～高齢者）

本をモノとしてとらえ、その歴史をたどる講座は、子どもから大人まで楽しむことができます。粘土板、パピルス、羊皮紙、手漉き紙、機械漉き紙といった本の支持体のサンプルを用意して、参加者が実際に触れられる工夫をしましょう。奥州宇宙遊学館で開催された「パピルスと羊皮紙に触ってみよう！」というワークショップでは、小学生とその保護者が参加し、本物のパピルスや羊皮紙に文字を書く体験をしました。收藏する様々な素材・形態の書物の展示を同時開催すると良いでしょう。



羽根ペン教室（対象：小学生～高齢者）

本物の羽根ペンを使ったワークショップも人気のイベントです。羽根ペン教室はこれまでに、私立大学図書館協会、お茶の水女子大学附属図書館、白百合女子大学図書館、成蹊大学図書館などで開催されています。羽根ペンで文字を実際に書いてみることによって、参加者は写本の制作がどれほど大変な作業だったのかを理解し、また、文字の形の変遷にも興味を持つようになります。收藏する写本の展示を同時開催すると良いでしょう。



修復実習（対象：中学生～高齢者）

破れたページを和紙で修復するワークショップも、子どもから大人まで楽しめるイベントです。和紙、正麩糊（しょうふのり。生麩糊とも）、水筆などを使って本のページを補修すると、本の修復がいかにか時間・手間・費用のかかる作業であるか、また、本を傷ませないための予防的な対策がいかにか重要かを、参加者に理解してもらうことができます。虫損資料、水損資料、汚損資料、劣化資料など、傷んでしまった收藏書の展示を同時開催すると良いでしょう。

バックヤード見学（対象：中高生～大人）

書庫などのバックヤード見学も人気のイベントです。一橋大学社会科学古典資料センターでは司書等を対象としたバックヤード見学を行っています。西洋貴重書がどのように管理されているのか、どれだけの職員が担当しているのか、地震対策、火災対策、IPM（総合的有害生物管理）等のためにどのような設備・機器・道具類が使われているのかを知ってもらうことで、西洋貴重書を收藏する図書館の支援者を増やすことや、将来の職員を育成することにもつながります。

古文書解読（対象：中高生～大人）

日本の古文書を使った古文書解読講座は人気の生涯学習イベントであり、全国の図書館で開催されています。西洋の古文書についても、歴史的な字母（アルファベット）の読み方、合字や略字の読み方、テキストの内容や歴史的背景などについて解説する古文書講座を開催すると良いでしょう。一橋大学社会科学古典資料センターでは、西洋古文書の解読講座を学部生・大学院生を対象に開催していました。

書誌学、美術学、文学史、音楽史、経済史などの各種講座（対象：大学生～大人）

一橋大学社会科学古典資料センターのように、西洋貴重書の書誌をテーマとして、書誌学の講座を開催するものひとつの方法です。挿絵や装丁に注目すれば、美術史の講座を開催することもできます。本の内容によっては、文学史、音楽史、経済史など、さまざまなジャンルで講座を開催することも可能です。講師はそれぞれの専門家に依頼すると良いでしょう。大学図書館の場合、まずはその大学の教員に依頼してみましょう。

自分の所属する図書館等でどのような生涯学習イベントができるか、自由な発想で考えてみましょう。西洋貴重書の多くは本文や装丁デザインの著作権が切れていますので、写真、動画、SNSを活用するのもよいでしょう。

2-1. 展示の技法 –活用と保存を両立させる–

西洋貴重書は世界に1点ないしは数点しかない場合が多く、文化財として永く後世に伝えてゆく必要があります。展示を行うときには必ず教育普及のための活用だけでなく保存との両立を目指しましょう。

素手での取り扱い

西洋貴重書の取り扱いは素手で行うのが原則です。かつては白手袋をはめるべきだという意見もありましたが、白手袋はすべりやすく引っかかりやすいため、本を落としたり破ったりするリスクを高めます。もちろん、素手で取り扱う前には、石鹸と流水で両手をよく洗い、手指の表面に付いている汚れ、皮脂、手指消毒液に含まれる保湿剤（濃グリセリン等）をしっかりと除去する必要があります。展示の準備が長時間に及ぶと、いつのまにか手が汚れたり汗をかいたりしているものですので、その都度、手を洗って、清浄な状態にしてから作業を再開しましょう。



使い捨てマスクと使い捨てニトリル手袋の着用

西洋貴重書のなかには、有害物質を含む色材（顔料、染料）が表紙や小口に使われているものがあります。特に19世紀に欧米で製本された本を扱う場合は、色材に含まれるヒ素や鉛といった毒性のある物質に気をつける必要があります。本に含まれる有害物質が人体に侵入する経路は、①吸引、②経口摂取、③皮膚からの吸収の三つです。有害物質を含む（あるいはその可能性がある）本を取り扱わなければならない場合は、本から出た埃を吸い込まないように、使い捨てマスクを着用し、周囲に飲食物を置かず、使い捨てニトリル手袋（パウダーフリー）を着用しましょう。



ブックサポートシステムとスネークウェイト

西洋貴重書のなかには、経年劣化によって革が硬化し、ページが開きにくくなっているものが少なくありません。そのような本を無理矢理に開いてしまうと、背の革が真っ二つに割れてしまったり、ノドや花布（はなぎれ）が切れたりといった物理的損傷が生じてしまいます。西洋貴重書は無理に開かず、ブックサポートシステム（ウレタン製書見台）やスネークウェイト（紐状文鎮）を使って、物理的負担の少ない角度で展示しましょう。



紫外線と赤外線

紫外線は西洋貴重書の変色・褪色の要因となり、赤外線は温度上昇・乾燥の要因となります。そのため、展示は窓のない部屋で行いましょう。窓がある部屋で展示しなければならない場合は、窓ガラスにUVカットフィルムを貼ったうえで遮光性の高いカーテンを吊るすことで、日光に含まれる紫外線・赤外線を遮断しましょう。照明も蛍光灯ではなく、紫外線や赤外線の放出量が少ないLEDを使用しましょう。なお、紫外線は紫外線強度計で測ることができますが、紫外線計測機能がついた温湿度データロガーを使用すると便利です。展示スペースから紫外線を除去すると、紫外線に集まる虫の侵入が抑制されるという効果も期待できます。



照度

西洋貴重書は写本（手書きの本）ないしは印刷物です。しかも、素描や版画が差し込まれているものや、染色した革・羊皮紙（ヴェラム）・クロス（布）・手漉き紙・機械漉き紙が装丁に使われているものも珍しくありません。そのため西洋貴重書は褪色や劣化のリスクが高く、展示の際に推奨される照度（明るさ）は50lx（ルクス）以下です。しかし、私たちは普段 300lx 以上の照度で読書をしているため、50lx で展示された西洋貴重書を初めて見る鑑賞者たちは、「暗すぎてよく見えない」と不満に感じてしまうおそれがあります。そのような不満を少しでも解消するためには、アプローチの空間を暗くして鑑賞者の目を暗さに慣れさせる、部屋全体の照度をさらに低くして相対的に西洋貴重書を明るく見せる、鑑賞者が照明を遮らないように照明・西洋貴重書・鑑賞者の位置関係を考慮してセッティングする、等の工夫が必要です。どうしても明るい場所で展示しなければならない場合は、ファクシミリ本などの複製を展示することで問題が解消されます。照度は照度計、あるいは、照度計測機能がついたデータロガーで測ります。



累積照度

照度を低く抑えていても、展示を長時間あるいは複数回行えば、光によるダメージが貴重書に蓄積してゆきます。それを防ぐためには、累積照度（照度×時間）の記録と計画的な展示替えが必要です。同じ資料や同じページばかりに光が当たらないように、展示期間を短くする、展示替えを行うなどして、累積照度を抑えましょう。累積照度を抑えても、フラッシュの強い光が当たっては意味がありませんので、フラッシュを使用しないように鑑賞者やマスコミに理解・協力を求めましょう。

温度

西洋貴重書の保存に適した温度は 20°C以下と言われており、展示においても 20°C以下の環境を作ることが望まれます。しかし、たとえば東京の場合、夏の気温が 30°Cを超えることが多く、展示会場が20°C以下では温度差が大きすぎて鑑賞者は展示スペースにいたることができません。また、消費電力を抑えることが求められている昨今、冷房を 20°Cに設定することが許されない機関も多いでしょう。そのため、展示スペースの温度は「できるかぎり低くする」というのが現実的です。ただし、温度が高ければ高いほど、本の劣化が進むことに留意しておく必要があります。また、収蔵庫と展示スペースの温度差が大きい場合は、いきなり西洋貴重書を移動すると、結露が発生したり、素材が急激に伸縮して物理的に破損する恐れがあります。移動の際には、中間的な温度の場所にしばらく置いて慣らしましょう。夜間は空調を停

止するという機能については、停止時・起動時に急激な温度変化が起こらないかどうかを事前に確認しておく必要もあります。

湿度

温度 20℃以上・相対湿度 60%以上の環境ではカビが活性化しやすくなると言われています。しかし、乾燥させすぎると、西洋貴重書に使用されている板、羊皮紙、革が縮んでひび割れるおそれがあります。そのため、書庫も展示ケース内も、相対湿度は 55%くらいに保つと良いでしょう。展示ケースに隙間があると湿度のコントロールが難しいので、密閉型のエアタイトケースを使用しましょう。展示ケースの中には調湿剤とデータロガーを設置して、湿度の調整とモニタリングを常時行います。

害虫とカビ

害虫が展示会場に侵入するのを抑制するため、建物入口の扉は開放しないようにしましょう（閉め忘れのない自動ドアが望ましいです）。示会場の周囲に緑が多い場合は、入口に靴の泥（泥にはカビの胞子や虫の卵などが入っています）を落とすためのマットを置いたり、手動式ドアの隙間に防虫ブラシ等を付けたりしすることで、虫（成虫、幼虫、卵）やカビ、泥や埃が会場に入るのをできるだけ防ぎましょう。虫は紫外線に集まりますので、照明には紫外線の放出が少ないLEDを使い、窓にはUVカットフィルムを貼りましょう。展示会場の外から中へと屋外の風が吹き込んでこないかも事前に確認しましょう。風は、虫やカビを含んだ土や埃を展示会場に運んできます。展示会場の近くに飲食店がある場合は、ネズミやゴキブリが展示会場に侵入するリスクがありますので、建物入口に超音波駆除機などを置いて害獣・害虫の侵入を防ぎましょう。カビ対策については本講習会の他の講義で詳しく論じられていますので詳細は割愛しますが、湿度の管理が重要です。公益財団法人文化財虫菌害研究所が「見てわかる文化財IPM」や「おもな虫・カビカレンダー」を無償で配布していますので、取り寄せて参考にしましょう。



パネルとキャプション

照度を抑えた展示スペースではパネルやキャプションの文字が読みにくくなります。背景色と文字色のコントラストを大きくし（白地に黒など）可読性の高いフォントを使い（ゴシック等）ポイントは大きめのものを使い、文章は簡潔にまとめましょう。キャプションは平置きせず、斜めに立たせたほうが見やすいです。できれば日本語と英語で併記しましょう。

撮影

最近は展示物の撮影や撮影した写真の SNS 拡散を歓迎する展覧会が増えています。撮影 OK であれば、会場が混みあっても鑑賞者には帰宅後にゆっくり写真を見ることができずし、来場できない方々にもその写真を通して間接的に展示を楽しんでもらうことができます。さらに、SNS を通しての宣伝効果も期待できます。ただし、強い光は西洋貴重書の劣化を促進しますので、フラッシュは使用厳禁です。なお、デジカメやスマホなかには、暗い場所で焦点を合わせるために被写体に赤外線や赤色光を照射するものが存在します。それら微小な赤外線・赤色光が西洋貴重書の劣化にどのような影響を与えるかは現時点では不明ですが、少なくとも赤色光の照射は赤い光がちらちらして他の鑑賞者の迷惑になりますので注意しましょう。また、ひとつの展示会場のなかに撮影 OK のものと撮影禁止のものがあると、鑑賞者が混乱してトラブルの原因となります。どれが撮影 OK でどれが撮影禁止なのか、わかりやすく表示しましょう。

展示会場

展示会場は地上階に設けましょう。万が一、大規模な地震や水害が発生した場合、地下からの文化財救出は困難を極めるからです。会場入口には無料コインロッカーと傘立てを用意します。大きな荷物や傘を展示会場に持ち込ませないことで、他の鑑賞者の邪魔になることや床が濡れて転倒しやすくなるのを防ぐだけでなく、展示ケースに荷物がぶつかるのを防いだり、盗難やテロのリスクを減らしたりすることが可能になります。可視光線や紫外線・赤外線による劣化を最小限に抑えるため、会場には窓がないことが望ましいですが、窓がある場合はブラインドやカーテンで太陽光を遮断しましょう。新築あるいは改修直後である場合は、展示会場の建材がアンモニアガスや有機酸ガスなど、西洋貴重書を劣化させるおそれのあるガスを放出していないか、パッシブインジケータなどを使って事前に確認しておきましょう。展示会場入口には、会場内で行って良いことや禁止事項を、ピクトグラムを添えて明記しておきましょう。



展示ケース

展示ケースは気密性の高い密閉型のもの（エアタイトケース）を選びましょう。そのほうが温湿度をコントロールしやすく、虫やカビの侵入を防ぐことができます。なお、新品の展示ケースの購入を検討する際には、その素材からアンモニアガスや有機酸ガスが放散されていないかを、事前にパッシブインジケータで確認しましょう。アンモニアは結果が出るまでに4～5日間、酢酸は結果が出るまでに6～7日間かかります。展示ケースは十分な高さで奥行きがあるものを選びましょう。本は開くと思いのほか場所をとりますし、調湿剤やデータロガーを置くスペースも展示ケース内に必要です。さらに、西洋貴重書はブックサポートシステムの上に置きますので、その分の高さも展示ケースには必要となります。

バリアフリー

車椅子に乗った鑑賞者や補助犬（盲導犬、介助犬、聴導犬）を同伴した鑑賞者が展示ケースにぶつからずに動けるように、展示会場の通路には十分な幅を確保し、障害物となりうるものを置かないようにし、段差にはスロープを設置しましょう。本は斜め上から見下ろす形で鑑賞しますので、車椅子に乗っていると視点高（目の位置）がぐっと低くなります。貴重書の展示位置が車椅子の鑑賞者にとって高くなりすぎないように注意しましょう。手話ができるスタッフが会場にいることや、展示会場のスタッフが筆談用の道具を持っていることは、聴覚に障害がある鑑賞者にとって重要です。音声読み上げソフト（アプリ）のおかげで、視覚に障害がある鑑賞者がアクセスできる文字情報は日々増えていますが、点字があればなお良いでしょう。鑑賞者の滞在時間を長くするためには、トイレの設備も重要です。オストメイト（人工肛門や人工膀胱を持つ方）対応のトイレが展示会場と同じ建物内にあることが望ましいです。

ユニバーサルデザイン

ピクトグラムや展示会場マップがあると、日本語を母語としない方や学習障害のある方が鑑賞しやすくなります。キャプションは日本語と英語の両方で書きましょう。展示パネルの文章は簡潔でわかりやすい表現を心がけましょう。

火災の対策

カーペットやカーテンを使用する場合は防炎性のものを選びましょう。自動火災報知機が正常に機能していることと、会場スタッフが消火器等の使い方を知っていることを事前に確認しておきましょう。文化財のための消火剤を含まない消火器も存在しますが、通常の消火器に比べて消火力は劣ります。

借用のための保険契約

他機関から西洋貴重書を借りて展示することがありますが、輸送中・展示中に損壊したり盗難にあったりした場合は、借り手側が責任を負うこととなります。損壊すればその修復にかかる費用を、失われればその評価額を、支払わなければなりません。そのため、借り手側は万が一に備えて、美術品・展示品等の損害保険に入りますが、保険料や補償額は対象となる展示品や保険の種類によって異なります。（海外から借りた文化財が損壊してしまった場合の補償額は数十億円から数千億円になることがあるため、日本には政府が1,000億円程度まで損壊した展示品の補償額を負担してくれる「美術品補償制度」がありますが、補償額の一部は自己負担となります。また、政府の補償を受けるためには、展示会場が登録博物館・博物館相当施設・国立美術館が設置する美術館・国立文化財機構が設置する博物館のいずれかである必要があり、政府による審査を通過する必要もあります。）

西洋貴重書保存インデックス

西洋貴重書の保存管理に関する基礎知識を30分ほどで学べる「西洋貴重書保存インデックス」のPDF版が一橋大学社会科学古典資料センターのサイトにアップされています。展示と保存の両立に役立つ知識も得られますので、ダウンロードして利用しましょう。

参考文献

三浦定俊、佐野千絵、木川りか『文化財保存環境学』朝倉書店、2004年。

公益財団法人文化財虫菌害研究所 <https://www.bunchuken.or.jp/>（最終閲覧日2024年10月21日）

文化庁「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要項の改訂について（通知）」

<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/hokoku/1401204.html>（最終閲覧日2024年10月21日）

文化庁「美術品補償制度」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/hoshoseido/（最終閲覧日2024年10月21日）

馬場幸栄「『西洋貴重書保存インデックス』による西洋貴重書保存管理の指標と評価

<https://cir.nii.ac.jp/crid/1390009224869192192>（最終閲覧日2024年10月21日）